KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

アンソニー・トロロープの『ジョン・カルディゲイト』における移住と帰国

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-10-05 キーワード (Ja): 移住, 帰国, オーストラリア, イングランド, 金鉱 キーワード (En): 作成者: 橋本, 史帆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008048

関西外国語大学 研究論集 第116号（2022年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.116 (September 2022)

アンソニー・トロロープの『ジョン・カルディゲイト』における移住と帰国

橋　本　史　帆

要　旨

『ジョン・カルディゲイト』では、ジョンとユーフェミアがイングランドからオーストラリアへ移住する。その後、二人はそれぞれ帰国するが、この二人の移住と帰国には、トロロープのオーストラリアに対する否定的な考えが表出されている。一方、作家は登場人物の人生を介して、オーストラリアの可能性を指摘し、植民地の力を取り込むイングランドの伝統的社会も描いている。小説では、ジョンを含めた中流階級以上の人々の暮らしは保証される。しかし、ジョンとユーフェミアの移住と帰国、及び、ヘスターを巻き込む重婚問題は、当時の移住政策の行き詰まりやイングランドを中心に捉えた暮らしや制度、価値観が通用しなくなっていることを詳らかにしている。トロロープにはイングランドの優位性を認める態度があるが、作家はその力の弱まりを作中に描き出してもいる。ここに、当時の伝統的価値観に対するトロロープの葛藤を見出すことができる。

キーワード：移住、帰国、オーストラリア、イングランド、金鉱

はじめに

アンソニー・トロロープ（Anthony Trollope, 1815-82）はその生涯に、長編47編、短編43編、旅行記５編、伝記３編、劇２作、自伝１編を世に輩出した。非常に多くの作品を執筆したものの、一般的にトロロープと言えば、イングランドにあるとされる架空の都市バーセット（Barset）に住む中流階級以上の人々の暮らしを描いた６冊の長編小説からなる「バーセットシャー年代記」（The Chronicles of Barsetshire, 1855-67）や、「パリサー小説」（The Palliser Novels, 1865-80）と呼ばれるヴィクトリア朝の政界を活写した６冊の小説群が主な研究対象となり、それ以外の作品については軽視されてきたきらいがある。さらに、トロロープの作品は、イングリッシュネスの典型として愛国主義に利用されてきたため（Julian Wolfreys 153）、ニコラス・バーンズ（Nicholas Birns）によると、植民地を扱った彼の作品が、伝統的なトロロープ研究者たちの間で顧みられることはなかったとのことである（7）。ところが、トロロープの作品には、植民地を含む外国を舞台にしたものが多数含まれている。例えば、『目には目を』（*An Eye for An Eye*, 1879）をはじめとする５つの長編小説は、イギリス領内にあったアイル

ランドを舞台にしたものであるし、『ガンゴイルのハリー・ヒースコウト』（*Harry Heathcote of Gangoil,* 1874）は、オーストラリアの僻地で羊牧場を経営するハリー・ヒースコウト（Harry Heathcote）の人生を描出している。そうなると、諸外国に触れた小説を分析することは、トロロープの外国に対する見方を解明することにつながっていくと考えられる。

もう一つの典型的なトロロープ評と言えば、ウィリアム・マイヤーズ（William Myers）やレイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）のものを挙げることができる。トロロープをチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）と比較したマイヤーズは、前者がヴィクトリア朝の因習にすんなり従っていると指摘し（105）、ウィリアムズもまた、トロロープがヴィクトリア朝の文化的混乱には見向きもせず、当時の因習を受け入れているとしている（84-86）。確かに、トロロープには当時の社会規範を重んじるところがあり、中流階級以上を中心とした社会秩序を好意的に捉えるところがある。しかしここで、ロバート・M・ポレマス（Robert M. Polhemus）の主張に目を転じると、ポレマスは、トロロープが既存の伝統的社会にもたらされる変化を描いた作家だと主張している（3）。そこで、『レディ・アンナ』（*Lady Anna,* 1874）を例に挙げる。イタリア人妻がいながらイングランドでジョセフィーヌ・マレー（Josephine Murray）と結婚したラヴェル卿（Lord Lovel）は、ジョセフィーヌと、彼女との間に生まれた娘アンナ（Anna）を捨て、イタリアに旅立つ。その後、ラヴェル卿は妻とは異なる別のイタリア人の愛人を連れて帰国するが、彼の死によって一家の爵位や資産、財産をめぐる争いが、イタリア人の愛人、アンナ、そしてラヴェル卿の従弟の三人の間で起こる。この騒動は、女性が置かれている状況に一石を投じ、上流階級の経済的・社会的力が外国との交流によって弱まりをみせていることを明らかにするものである。作中には、伝統的価値観や支配者層のあり様を問い直すような作者の視点が潜んでいるというわけだ。

そこで本稿では、これまで見過ごされがちだった小説で、イングランドとオーストラリアを舞台にした『ジョン・カルディゲイト』（*John Caldigate,* 1879）を取り上げる。この作品は1878年４月から翌年６月までの間に『ブラックウッズ・マガジン』（*Blackwood's Magazine*）に掲載され、1879年６月に三巻本としてチャップマン・アンド・ホール（Chapman & Hall）から出版された。ケンブリッジ（Cambridge）のフォーキング（Folking）に地所を持つカルディゲイト家の長男ジョン・カルディゲイト（John Caldigate）は、放蕩の末、オーストラリア移住を果たす。その後、金鉱で成功した彼は母国に戻り、フォーキングの領主にふさわしい人物として尊敬を集め、裕福な銀行家の娘ヘスター・ボルトン（Hester Bolton）と結婚する。しかし、オーストラリアに向かう船上で親しくなったユーフェミア・スミス（Euphemia Smith）が突然イングランドに戻ってきて、オーストラリアでジョンと結婚していたと言い出し、彼を重婚罪で訴えることになる。本論考では、ジョンとユーフェミアの植民地への移住とそこからの帰国が持つ意味と、彼らの移住と帰国がケンブリッジ社会にもたらす影響を、ジョン、ユーフェ

ミア、そしてヘスターとの間に起きた重婚問題と絡めて考察していく。そして、これらの分析を通じて、トロロープがいかにイングランドとオーストラリアを作中に描き出しているか検証していきたい。

1．ジョンのオーストラリアへの移住と帰国

オーストラリアはイギリスの流刑地として有名であったが、1820年代以降、当地は移民を受け入れる植民地、そして自治領へと変貌していった。そのような中、様々な社会的背景を持った人々が、それぞれの目的をもってオーストラリアへ移住したが、イギリスの植民地や自治領への移住は、イギリス政府、植民地政府、移民団体などによって推奨されたものでもあった。というのも、エリック・J・ホブズボーム（Eric J. Hobsbawm）が当時の植民地を「ゴミ箱」(84)と評したように、移住はイギリス社会にとって不都合とみなされた人々――人口増加によって激増した貧民、犯罪者、「余った女」、あるいは当時の道徳規範に反する行為を行った人々など――を国外へ送り出す政治的・社会的手段であったからである。さらに、オーストラリアへ移住した人々の中には、「本国からの送金で暮らす在外イギリス人」（Marjory Harper and Stephen Constantine 63）と呼ばれる人々がいた。この呼称は、学業不振や事業の失敗、あるいは、不道徳な振る舞いなどからイギリスを離れ、実家からの送金を当てに植民地で暮らす裕福な家の子供たちに付けられたものだった（Harper and Constantine 63）。

作中のジョンは、オーストラリアのニュー・サウス・ウエールズで発見された金を採掘するために移住するが、実はその移住は熟慮されたものではなく、現実逃避から生じたものだった。ジョンはケンブリッジ大学に在籍中から、ニューマーケットの競馬場で800ポンドを超える借金を重ねていた。借金返済に悩んだジョンは、もともと不仲であった父ダニエル・カルディゲイト（Daniel Caldigate）にすべてを打ち明け、フォーキングの土地とスクワイアの称号を相続する権利を放棄するかわりにダニエルから金を受け取り、その一部を使って借金を返すことになる。この件を巡って父親の信頼を完全に失ったジョンは、オーストラリアで発見された金のことを思い出し、大学の友人リチャード・シャンド（Richard Shand）と共に移住しようと考える。このように、ジョンは父親との確執から逃れようとする中、金採掘を思いつき、移住することになったのである。

ジョンの移住は彼の女性問題とも絡んでいた。ジョンは叔母のメアリー・アン・バビントン（Mary Anne Babington）、通称ポリー叔母さん（Aunt Polly）によって従妹のジュリア・バビントン（Julia Babington）との結婚を迫られる。ところが、ジョンがこの申し出をはっきりと断らなかったため、ポリー叔母さんとジュリアはジョンとの結婚が決まったと思い込んでしまう。この後、ジョンは二人の誤解を解くことなしに移住し、4年間戻ってこない。さらに、オー

ストラリアに出発する前にシャンド家に滞在したジョンは、そこでリチャードの末の妹マリア・シャンド（Maria Shand）とキスをし、それはマリアにとっては忘れがたい思い出となる。しかし、移住先から戻ったジョンは、マリアとの間に起きたことには責任がないと言って、マリアの気持ちに応えない。ジョンとジュリア、マリアとの間には結婚の約束はなかった。しかし、二人の女性の心を傷つけたという点で、彼は女性をたぶらかす誘惑者となるのである。借金問題と父親との不和、さらには、女性問題を抱え、逃げ出すように移住するジョンは、不行跡から移住した「本国からの送金で暮らす在外イギリス人」の類に入るのだ。

次に、オーストラリアの金鉱でのジョンの生活について考察する。オーストラリアに到着してから数ヶ月の間に、ジョンはアハララ（Ahalala）で金鉱を探し当てる。これをもとに、ジョンはアハララの近くにあるノブル（Nobble）に金鉱山を所有するティモシー・クリンケット（Timothy Crinkett）のパートナーとなり、当鉱山のマネージャーに就任して、利益の配当を受けることになる。さらに、ジョンは発見した鉱山を売りに出す代わりに別の鉱山開発に乗り出し、事業を拡大させる。故郷を出発してから4年の間に裕福になったジョンは、フォーキングの相続権の買い戻しを始め、父親の信頼を勝ち取る。このようなジョンの活躍は、オーストラリアの社会的流動性が高いことを示している。ジョンは潤沢な資金を持ち、大学教育を受けた人物であるが、金採掘後のジョンの成功は、母国における彼の出自とは関係なく達成されたものだ。これはまた、クリンケットについても言える。作品はクリンケットの出自について述べていないが、彼の粗野な言葉遣いや振る舞いから、彼の身分が高くないことは明らかだ。しかし、ノブルの金鉱山を発見したクリンケットは、鉱山のそばに建てた豪邸に妻と二人で暮らし、人々から「その土地の名士」(84)[1]と呼ばれるまでに成功する。金鉱山の発見は運任せであるが、それをビジネスとして軌道に乗せたクリンケットの成功は、彼の実力によるものだ。イギリスの植民地だったオーストラリアは、政治・文化・経済の点でイギリスの影響を受けていた。しかし、ビバリー・キングストン（Beverley Kingston）が詳しいように、そこでは才能、熱意、お金、あるいは教育が、階級という伝統的障壁を取り払うものだった（*Oxford* 287）。ジョンとクリンケットが実力で勝ち取った成功は、オーストラリアが社会的地位と経済的上昇が連動するイギリスのヒエラルキー社会の影響を受けていないことを示唆している。つまり、作中では、オーストラリアには開かれた社会があるとされているのだ。

次に、トロロープのオーストラリアに対する見解を探っていく。トロロープは『ガンゴイルのハリー・ヒースコウト』の中で、1863年にオーストラリアへ移住した息子フレデリック・トロロープ（Frederick Trollope）をモデルにした主人公ハリーが、オーストラリアの厳しい環境下で羊牧場の経営を成功させる姿を描いた。ジョンやクリンケットの成功も考慮すると、トロロープはオーストラリアを、移住者に新しい人生を始める機会や自由を与える場所とみていたようである。また、1871年にフレデリックを尋ねたトロロープは、その時に訪れたオースト

ラリアとニュージーランドの様子を2巻本からなる旅行記『オーストラリアとニュージーランド』（*Australia and New Zealand,* 1873）の中で詳述している。この時、クイーンズランドのギンピー（Gympie）の金鉱山に出向いたトロロープは、鉱夫たちが粗野であるものの、礼儀正しく勤勉で、喧嘩をしたり、仕事中に酒を飲んだりしないと記している（1: 81, 82, 85）。鉱夫に対する一般的な悪印象とは異なり、トロロープは鉱山で働く人々に感銘を受けたわけである。しかし、作中では鉱夫ミック・マゴット（Mick Maggot）とリチャードの破滅を通じて、オーストラリアの金鉱に関連した負の側面が描かれ、移住の危険性が示されている。鉱夫としての腕を見込まれ、ジョンたちの仲間になったミックは、たびたび飲酒問題に悩まされ、発見した金鉱の分け前を受け取った後、自殺する。リチャードの場合、大学時代から競馬と酒にのめり込んでいた彼は、移住先で飲酒の問題を深刻化させ、鉱山事業から手を引く。トロロープはオーストラリアに潜む可能性を認めつつも、当地をユートピアとは捉えていないのである。

さらにまた、トロロープはイングランドこそが最高の場所であり、オーストラリアはイングランドより見劣りすると考えている。『オーストラリアとニュージーランド』では、オーストラリアはイングランドに比べ、「荒々しさ」（1: 467）[2)] が目立つとしている。また、当地への移住を相談された人は、「イングランド人にとってイングランドのような場所はどこにもない」（2: 140）と考えるに違いないと述べている。そして、議員や裕福なイングランド人にとって、「イングランドは非常に心地よい故郷」（2: 140）であり、オーストラリアは良家の子息にはふさわしくない場所という見解を示している（1: 480）。トロロープはまた、オーストラリアの金鉱がジェントルマンを堕落させるとしており、それは息子の友人であった立派な青年とオーストラリアの金採掘場で再会した時、その青年がフライパンから直接肉を食べている姿にトロロープが幻滅したエピソードからもわかる（1: 89）。

このような作家の見解は、作中におけるジョンの人物造型にも反映されている。ジョンはかつて責任感に欠ける人物であったが、オーストラリアでの彼の評判はよく、ジョンは周囲の人々から、「正直、勤勉、そして有能である」（174）と言われるまでになる。また、ジョンは酒に溺れるリチャードやミックとは異なり、自制心を持ち、破滅することはなかった。帰国後に明らかになるジョンの重婚問題は、彼の不誠実さを晒すことになるが、ジョンが植民地に滞在している間に、不真面目な態度を多少なりとも改めたのは否めない。しかし、全64章からなる本作品では、ジョンがオーストラリアに到着し、金を発見するまでの記述は第9章から第12章までしかなく、彼が当地で事業を拡大させたことは、第13章と第14章にわずかに言及されているだけである。ジョンがオーストラリアで何を学び、人間的にどのように変化していったかは詳述されていないため、オーストラリアはジョンの内的変化とは無関係の場所という印象を読者に与えているのである。さらに、フォーキングにいた頃、ジョンはスクワイアとして過ごす人生を嫌っていた。しかし、いざ故郷を去るときには相続権放棄を後悔するようになり、実

家の安定性と名声に心地よさを感じずにはいられない。移住してからはオーストラリアを嫌悪し、フォーキングの相続権を取り返したいという気持ちを高めていく。また、ジョンはヴィクトリア朝時代に一般的だった女性観の持ち主で、妻は「とても厳粛で神聖であり」(76)、「好ましく、清らで、思いやりがある」(76) ものだと考え、「家庭の天使」を理想の女性とみなしている。オーストラリアに移住してからもジョンはこの価値観を持ち続け、故郷で出会った純粋無垢なヘスターの姿を思い返し、過酷な暮らしを乗り切っていく。その際、ジョンは現地の女性を見下し、距離をとる。つまり、ジョンが思い描く理想の女性とはイングランド人なのである。ジョンの変化がオーストラリアと結びつかない描写や、オーストラリアにいてもイングランドを思慕し、母国の価値観に則って生きるジョンの生き方に、オーストラリアに関心を寄せながらも、イングランドの優位性を信じるトロロープの見解が写し出されている。

オーストラリアの鉱山事業で成功した後、国に戻ったジョンは、ヘスターと結婚したいとボルトン夫妻に告げる。このジョンの結婚問題は、ケンブリッジ社会の実情を明らかにするものとなる。ジョンの申し出にボルトン夫妻は困惑するが、そのような二人を説得するのが、ヘスターの兄で弁護士のロバート・ボルトン (Robert Bolton) とウィリアム・ボルトン (William Bolton) である。ロバートが植民地から戻ったジョンについて、「疑いもなく荒っぽい人間と一緒に暮らしてきたけど、それでも彼はジェントルマンのように見えるね」(171) と言うように、二人の兄弟が注目するのは、ジョンに植民地を連想させる振る舞いや雰囲気がなく、彼がジェントルマンと呼ぶにふさわしい上品な人物であるかどうかという点である。そのために、二人は人を使ってジョンのオーストラリアでの行動と、彼の人柄と能力を調査する。つまり、兄弟はケンブリッジのジェントルマン社会に、植民地的なものが持ち込まれることを拒んでいるのである。しかし、彼らがジョンの経済力に興味を示している点は見逃せない。ロバートたちは、帰国したジョンがオーストラリアに所有していた鉱山を、クリンケットやユーフェミアに売り払って6万ポンドを手に入れていることを両親に繰り返し説明し、ジョンとヘスターとの結婚を認めるよう夫妻を説き伏せる。ロバートたちがジョンを認めたのは、ジョンがジェントルマンと呼ぶに値する人物であること以外に、植民地で獲得された彼の経済力に魅力を感じていたからなのである。これはまた、ケンブリッジの人々にもみられる反応である。裕福になって帰ってきたジョンが、たちまち町の有力者の一人とみなされるあたり、植民地でのジョンの経済的成功が、人々によって好意的に受け止められているのは明らかである。のちにジョンとユーフェミアの関係が世間に知れわたると、ボルトン兄弟はジョンと敵対するようになる。しかし、最終的にはボルトン家の人々や世間の人々は、ジョンのオーストラリアでのロマンスを不問に付し、ジョンとヘスターの結婚を応援することになる。つまり、ケンブリッジのジェントルマン社会は、ジョンが真の意味でのジェントルマンであることよりも、彼がオーストラリアから持ち帰ってきた経済力を高く評価し、彼を町にふさわしい人物として迎え入れているのである。

ケンブリッジ社会のジョンに対する対応は、イングランドとオーストラリアの経済的共存関係を物語るものである。というのも、フォーキングの相続権放棄によって得られた資金は、オーストラリアの金鉱開発に使われ、ジョンが鉱山事業で得た利益は故郷に還元されているからである。トロロープはかつて『ソーン医師』（*Doctor Thorne,* 1858）の中で、石工から身を起こし、建築業で巨万の富を築いたものの、肉体的苦痛と精神的疎外感に苦しむサー・ロジャー・スキャッチャード（Sir. Roger Scatcherd）を登場させ、産業資本主義・商業資本主義の俗悪を描いた。また、ディケンズは『大いなる遺産』（*Great Expectations,* 1860-61）の中で、オーストラリアで儲けた金を使って、孤児のピップ（Pip）をジェントルマンにしようとする囚人エイベル・マグウイッチ（Abel Magwitch）を描いたが、最終的にピップは財産を売り払っており、オーストラリアからの金銭的援助は好ましいものとはされていない。しかし、本作品ではジョンの商業的成功は問題視されず、オーストラリアとの金銭的取引は肯定的に受け止められている。トロロープはジョンの帰国を通じて、オーストラリアの経済力を取り込んでいくイングランド社会を描出しているのである。

2．ユーフェミアのオーストラリアへの移住と帰国

ユーフェミアは、ジョンが移住する際に乗船したゴールデンファインダー号の二等船室に乗っていた20代前半の元女優で、結婚して間もなく、酒におぼれた俳優の夫が亡くなったため、亡夫の遠い親戚と共にオーストラリア行きを決めた女性である。彼女は幼い頃から舞台で歌い踊って暮らさなければならないほど貧しい家庭で育った。しかし、船上のユーフェミアはみすぼらしい格好をしながらも上品に振る舞い、読書をすることで、亡夫の親戚や二等船室にいる他の乗客と格が違うことを見せつける。さらに、彼女は意図的に労働者の格好をして二等船室に乗り合わせたジョンが、ジェントルマン階層に属していることを見抜くと、彼と知的な会話をして魅了し、結婚の約束を取り付ける。ユーフェミアは元女優の経験を活かし、中流階級の女性という印象を与えることに成功して、階級の壁を越えてみせるのである。

タマラ・S・ワグナー（Tamara S. Wagner）が、ユーフェミアは女性人口の多さから植民地に出掛けた中流階級の独身女性の典型だと指摘しているように（125）、彼女の旅立ちには、当時の女性移住のある一面が表出されている。オーストラリアではイギリス人男性の入植者が女性より圧倒的に多かったため、慢性的な嫁不足に陥っていた。そこで1830年代から人口における男女比のバランスを整えるため、イギリス政府及び植民地政府は女性の移住者を募った。加えて、イギリスでは、1840年代頃から男性の海外移住と晩婚化のため、結婚できない女性が大量に出現していた。とりわけ、生活のために働くことを許されなかった中流階級の未婚女性にとってこの状況は深刻で、彼女たちは「余った女」と呼ばれ、社会問題となった。そこでイギ

リス政府はこの問題を解決すべく、「余った女」をオーストラリアに移住させるという対応策を取った。作中のユーフェミアは貧しい生まれの女性とされているが、中流階級の女性のように振る舞う彼女の孤独な旅立ちは、イギリスとオーストラリアの間で行われた移住プロジェクトの一環として読むことができるのである。

次に、現実に移住を推奨された未婚女性が移住先で求められた役割についてみていくと、それは移住先で結婚することや、キングストンの言葉を借りれば、「結婚と家庭を通じて（イギリスの）秩序と安定を再現し、再創造することであった」（*Women* 91）。女性は「家庭の天使」として移住先にイギリス人の家族を作り、イギリスの文化と価値観を定着させる役目を付与されていたのである。ところが、作中のユーフェミアは現地に到着すると、型破りな女性移住者となる。オーストラリアに着くと、ユーフェミアはマドモアゼル・セッティーニ（Mademoiselle Cettini）と名乗り、シドニーの劇場で裸に近い格好で踊り歌う人気女優になる。金採掘で成功したジョンと再会すると、彼女はジョンとアハララで同棲し始め、カルディゲイト夫人（Mrs. Caldigate）と名前を変え、ジョンやクリンケットと共に金採掘に乗り出し、株取引を行う。その後、金採掘者として富を得る中でユーフェミアはジョンとの関係を解消し、妻と別れたクリンケットと交際し、今度はクリンケット夫人（Mrs. Crinkett）と名乗って彼と暮らす。ユーフェミアが出国前に使っていた名字であるスミスは、ケイト・トマス（Kate Thomas）によると、性的な目的で下宿屋を利用する人々によってしばしば使用される名前だった（83）。その名字が示唆するように、ユーフェミアは女性の魅力を武器に奔放に生きる。さらに、彼女は結婚することなく、金採掘に邁進して男性の領域である事業家の道を歩んでいく。つまり、ユーフェミアは、妻や母として安息の家庭を提供することが女性の第一義的役割だとするヴィクトリア朝の家庭重視のイデオロギーの影響を受けていないのである。移住女性にはイギリス的なものを根付かせる役割が課せられた。しかし、ユーフェミアの人生は、それに縛られることなく自由に生きる生き方がオーストラリアにあることを物語っているのである。

このようなユーフェミアの生き方を勘案すると、彼女とオーストラリアの間に固い結びつきがあることがわかる。トロロープは『オーストラリアとニュージーランド』で、オーストラリア人女性が「賢くて理解が早く」（1: 476）、彼女たちの「資質は非常に優れており、力強さではあまりある」（1: 478）と記している。作家が認めたオーストラリア人女性の賢さと力強さは、ユーフェミアの度胸ある言動と通じている。ユーフェミアはイングランド出身であるが、彼女の言動から、ユーフェミアはオーストラリアを表象する人物として造型されていると解釈することができるのだ。

ところで、作中において、ユーフェミアが前向きに人生を歩んでいる様子が詳述されるのは、シドニーでの女優時代までである。その後、ユーフェミアについての言及はしばらく途絶え、次に彼女の動向が知らされるのは、ジョンがヘスターと結婚した頃である。帰国したジョンは、

オーストラリアに所有していた鉱山をクリンケットやユーフェミアらに売り払うが、その鉱山が枯渇したため、クリンケットたちは多額の損失を被ってしまう。そこでクリンケットとユーフェミアは、損失の一部にあたる２万ポンドを弁済するようをジョンに迫り、ユーフェミアの場合、ジョンが要求に応じなければ、実際は違うのだが、ジョンが彼女とアハララで結婚していたことを公表すると脅迫し始める。その後、クリンケットとユーフェミアはイングランドに戻り、ジョンから２万ポンドを受け取ることに成功すると共に、ユーフェミアはジョンが彼女とオーストラリアで結婚していたのに、イングランドでヘスターと結婚したとケンブリッジの裁判所に訴える。読者はジョンがヘスターと結婚したあたりから、徐々にユーフェミアとジョンがアハララで同棲していたことや、ユーフェミアが金採掘や株取引で成功したものの、事業に失敗してしまい、元恋人を脅しに戻ってきたことを知らされるのである。

このようなユーフェミアの帰国は、当時の移住政策の失敗例として読むことができる。植民地で二人の男性と同棲生活を送るユーフェミアの人生は、結婚を通じてイギリス文化を植民地に根付かせるという移住政策の躓きを仄めかすものである。さらに、当初、移住先で経済的成功を収めるものの、結局一文無しになり、脅迫者となるユーフェミアの帰郷は、本来、貧しい人々や犯罪者を植民地に送り出すことを目的にしていた移住政策に反するものである。このように、ユーフェミアの帰国には、イギリスの移住政策を実現させることの難しさが表されているのだ。

次に着目したいのは、ユーフェミアが移住に失敗して戻ってくる帰国者として否定的に人物造型されている点である。作中では、シドニーでの女優時代以降、ユーフェミアが本音や言い分を述べる場面は皆無に等しく、ユーフェミアの様子は語り手や彼女以外の登場人物によって説明されるが、それは彼女の立場に立ったものではない。例えば、ジョンはオーストラリアから戻ってきたユーフェミアたちとロンドンのカフェで落ち合い、２万ポンドを渡す。ここで、ユーフェミアとクリンケットはすぐにオーストラリアへ帰ると約束するが、結局二人はその約束を破り、ユーフェミアはジョンを重婚罪で訴える。しかし、大金を手にすることができたユーフェミアがなぜジョンを訴えたのか、その理由は一切明らかにされない。これはプロット上の欠点とも言えるが、別の見方をすれば、ユーフェミアは、どのような気持ちをジョンに抱き、いかなる考えから裁判を起こしたか、それらを述べる機会を与えられていないのだ。このような中、複数の登場人物と語り手を通じて、ユーフェミアの人物像が明確化されるが、それらはいずれも彼女を信用できない悪人とするものである。次の場面は、ロンドンのカフェで久しぶりにユーフェミアと再会したジョンが目にするユーフェミアの様子を述べたものである。

> There was no attraction now. She was much aged; and her face was coarse, as though she had taken to drinking. But there was still about her something of that look of

intellect which had captivated him more, perhaps, than her beauty. Since those days she had become a slave to gold,—and such slave is hardly compatible with good looks in a woman. (377)

ここでは、ユーフェミアは金採掘と酒に心を奪われ、堕ちるところまで堕ちた女性と描出されている。その後、ケンブリッジの法廷にユーフェミアが姿を現すと、ジョンの弁護を担当する弁護士シーリー氏（Mr. Seely）は彼女を見て、ユーフェミアを含む「証人たちは人柄が悪い人間だ」(397) と評する。また、ジョンのもう一人の担当弁護士サー・ジョン・ジョラム（Sir John Jorum）（以下、サー・ジョンと略記）のユーフェミアへの感想は、「その女性は飲んだくれで美しい容貌を失っているから、陪審員たちは彼女には寛大ではないだろうね」(408) というものだ。ユーフェミアは金採掘に失敗してオーストラリアから戻ってきた、酒に溺れた不審人物とされているのである。

では、なぜ作家はシドニーの女優時代以降のユーフェミアに、彼女の考えや感情を表明する機会を与えなかったのだろうか。ユーフェミアの言い分を書くには、彼女とジョンがオーストラリアでどのような関係を築き、いかに暮らしたかを詳述する必要がある。しかし、作中における二人の同棲生活に関する情報は極端に少ない。この点について、ダイアナ・C・アーチボルト（Diana C. Archibald）は、作家が貸本屋から圧力を受けていた可能性について言及している (98)。貸本屋が主に本を提供していた読者は、道徳を重視する中流階級であった。さらに、この作品を連載していた『ブラックウッズ・マガジン』の読者もまた、中流階級であったのだ。このようなところから、トロロープは当時の読者層に配慮し、ユーフェミアとジョンの植民地での暮らしぶりを詳しく書くことは避けたと考えられる。その結果、ユーフェミアの言い分は描かれなくなり、かわりに彼女は金鉱によって精神と肉体を蝕まれ、犯罪に手を染めた酔っぱらいの帰国者という印象を残す登場人物になったのである。加えて、そのような彼女は「そのオーストラリア人女性」(243) と呼ばれているのである。女優、そして事業家として成功したユーフェミアからは、自由で力強いオーストラリアを想像することができた。しかし、ユーフェミアが帰国者として戻ってきた時、そのイメージは崩れ、オーストラリアは堕落や無秩序と結びつく土地となっていくのである。

3．重婚問題とバグワックスによる封筒分析の顛末

ジョンとユーフェミアのオーストラリアへの移住とイングランドへの帰国は、ヘスターとの重婚問題を引き起こすことになる。そして、この騒動を扱う裁判には、いくつかの問題点が含まれている。そこで次に、ケンブリッジの法廷場面にみられる瑕疵を指摘する。

ジェイムズ・R・キンケイド（James R. Kincaid）は本作品を、「トロロープの最も優れた、しかし最も知られていない小説の一つ」（244）と高く評価しているが、この作品にはプロットやストーリー展開に不自然な箇所が散見される。既述したように、ジョンから２万ポンドを受け取ったユーフェミアが、ジョンを重婚罪で訴えることになった経緯は不可解である。さらに、本稿が着目するのは、ケンブリッジの法廷が、オーストラリアでのジョンとユーフェミアの結婚の有無を決める証拠を精査していない点である。ユーフェミアはジョンを訴えた時、二人の結婚を証明するものとして結婚登録書の写しを提出する。ユーフェミアによると、結婚登録書は彼女がアハララにいた時、メソジストの牧師であるアラン氏（Mr. Allan）によって、牧師が所有していた本の一頁を使ってどこかで作成されたものとされている。しかし、アラン氏は十分な教育を受けていない人物であり、彼が本当の牧師であるかどうかは疑わしい。また、その結婚登録書は本の一部を使って作られたものであり、作られた場所もわからないとなると、結婚登録書自体が怪しげな代物と言えるのだ。加えて、ユーフェミアが提示したのはその写しであり、それは誰によって作成されたかもわからないものなのである。結婚登録書の写しを確認したサー・ジョンも、それが教会の保管所にあったものでもなければ、結婚を証明する正当な謄本でもないため、結婚は法的に証明できないと主張している。これらのことを考慮すれば、ジョンとユーフェミアの結婚は法的にはなかったと言えるはずだ。それにも関わらず、この結婚登録書の写しが法廷で結婚の有無を決める重要証拠とみなされることはないのである。父親が弁護士だったトロロープは、様々な作品に弁護士を登場させ、法廷場面を描いたが、N・ジョン・ホール（N. John Hall）が述べるように、しばしば専門家から法律関連の記述に誤りがあると指摘されることがあった（x-xi）。本作品の場合、作中の結婚登録書の写しに関する議論が、法的に誤ったものだとは言えない。しかし、それがぞんざいに扱われているのは無視できない。

それでは、この裁判の争点はどこかと言えば、ジョンがユーフェミアに送ったとされる手紙入りの封筒の真贋である。この封筒の表書きには「カルディゲイト夫人、アハララ、ノブル」（280）と書かれていた。ユーフェミアは、それはシドニーにいるジョンが彼女に送ったもので、二人の結婚を示すものだと訴える。一方、ジョンは遊び半分で封筒に「カルディゲイト夫人」と書いたことを認めるが、実際に彼女をそのように呼んだことはなく、まして封筒を投函したことはないと言う。サー・ジョンは、シドニーのポストで押された封筒の消印が偽造だと主張し、ロンドンの郵便局に勤める郵便局員サミュエル・バグワックス（Samuel Bagwax）とカーリーダウン氏（Mr. Curlydown）を呼び出し、ジョンが封筒を出していないことを証明しようとする。つまり、法廷では、封筒がジョンによって送られたのであれば、それは植民地の結婚を証明するものだという理解のもとで話が進んでいくのである。しかし、封筒を根拠にジョンとユーフェミアの間に結婚があったと捉えること自体、無理な話だと言わざるを得ない。

裁判の最後では、判事ブランバー（Mr. Justice Bramber）がこれまでの議論をまとめ、意

見表明することになる。裁判中、ジョンは2万ポンドの支払いについて、ユーフェミアとの結婚があったことを彼女に黙っていてもらうためではなく、多額の損失を被った彼女とクリンケットを気の毒に思って支払ったものだと主張するが、判事は2万ポンドを口止め料と判断する。さらに、消印の真贋より、封筒そのものが結婚を証明するものだと指摘する。この後、判事の説明に影響を受けた陪審員はジョンの重婚を認め、彼を有罪とする。しかし、怪しげな結婚証明書の写しと封筒に関する議論を考えると、2万ポンドを口止め料と判断したところで、ジョンとユーフェミアが正式な夫婦だったと断言することはできないはずだ。ケンブリッジの法廷は、法的に証明できないオーストラリアでの結婚を認めてしまったと言えるのだ。

それでは、ジョンとユーフェミアの移住と帰国によって起こる重婚問題には、どのような意味が含まれているか考察していく。まず、この問題はカルディゲイト夫妻の実態を明らかにするものである。ヘスターは重婚騒ぎの中、ジョンの無罪を信じ、「私が彼の妻である間は彼に従うわ、彼だけにね」(419) と、ジョンの忠実な妻であることを訴え、生まれたばかりの息子と家族を守ろうとする。彼女は典型的な「家庭の天使」として描かれ、家庭重視のイデオロギーを体現する人物となっている。このようなヘスターは、「私は、そうしようとしても、カルディゲイト夫人以外の何者にもなれないんです」(317)、「私は私の声が届く限り、自分のことをカルディゲイトの妻と呼びます」(318) と言って、自分こそがジョンの妻であると繰り返す。一見すると、ヘスターはジョンに寄り添う従順な妻とみれなくもない。しかし、ヘスターはジョンからユーフェミアとの関係を打ち明けられた時、その事実に驚くものの、彼女がジョンの過去に向き合い、彼の女性問題に心を痛めることはない。この意味で、ヘスターは夫の本当の姿に無関心なのである。すると、ヘスターが自分こそ「カルディゲイト夫人」であり、「カルディゲイトの妻」だと主張するのは、妻としてジョンを精神的に支えようとすることよりも、カルディゲイト家の一員として家を守ることに彼女の意識が向けられていると解釈できる。ジョンの場合、彼はジュリアとマリアを苦しめたことやユーフェミアと結婚の約束をし、同棲までしていたことを真摯に受け止めないまま、ヘスターとの結婚生活を続けていく。重婚騒動が起きると、「彼女（ヘスター）は私にとって必要不可欠な存在なんです」(276)、「彼女の名前は私の名前なんだ」(276)、「そして、私の名前は彼女の名前なんだ」(276) と言って、自分とヘスターは一心同体だと説明する。ここで、ジョンがヘスターとの固い結びつきを表すために、カルディゲイトを意味する「名前」に言及しているところは無視できない。過去の言動を反省しないままヘスターと暮らすジョンを、誠実で信用できる夫とみなすことは難しい。そうなると、ジョンはヘスターを愛する妻とみる以上に、彼女をカルディゲイトという家を共に守るパートナーと捉えていると読めなくもない。判決後、しばらくすると恩赦が下され、ジョンは妻子と再び暮らし始めるが、アーチボルトの言葉を借りれば、「彼らの幸せは破られた約束と身勝手さの上に成り立っており、疑いは残ったままなのである」(102)。重婚問題は、ジョンとヘス

ターの繋がりがお互いを理解し、信頼し合う夫婦としてのものよりも、家の存続という意味でのほうが強固であることを浮き彫りにし、二人の関係が愛情面で希薄であることを炙り出しているのである。

さらに、ジョンの重婚問題は、イングランドで成立した結婚が絶対的ではないことを意味している。重婚騒動が起こると、ケンブリッジではヘスター母子に対して同情の声が上がる。サー・ジョンはユーフェミアとジョンの結婚が、「若い妻から…彼女の夫を奪いとり」(404)、「彼の息子から彼の嫡出子としての正当性を奪うこと」(404) になると嘆く。判事ブランバーでさえヘスターの将来を心配し、彼女を「名前を失った赤ん坊を抱える今や名前を失ったままになったあの気の毒な女性」(417) だと哀れむ。なお、この裁判では、ジョンのオーストラリアでの結婚は認められるが、ヘスターとの結婚が違法とみなされ、無効になったり、夫妻の息子が法的に非嫡出子となるわけではない。では、なぜ人々はヘスター母子の状況を嘆くのだろうか。それは、ケンブリッジの人々のオーストラリアに対する見方と関わりがある。作中では、オーストラリアは「粗野な無法地帯」(353) とされており、例えばロバートは次の引用文にあるように、オーストラリアでは結婚に関する法秩序が欠如していると説明している。

> '. . . Their marriage laws are not the same as ours, though how they may differ you and I probably do not accurately know. And they may be altered at any time as they may please.' (242)

ジョンの伯父であるハンフリー・バビントン (Humphrey Babington) の場合、彼はジョンとユーフェミアとの結婚について、「アハララみたいな辺鄙な所での結婚なんて大した意味を持たなかった」(494) という見方を示しており、オーストラリアで起こったことは取るに足らないものだとしている。これはつまり、ケンブリッジの人々が、オーストラリアでの結婚よりイングランドで成立した結婚のほうがより確かなものであり、効力を持つと考えていることを意味している。そして、ここに、イングランドを中心に据えた価値観を見出すことができるのである。しかし、オーストラリアでのジョンとユーフェミアの結婚が認められることで、イングランドにおける結婚の絶対性は失われ、イングランドを中心に捉えた見方もまた否定されることになる。ヘスター母子に対する人々の反応には、イングランド中心主義的価値観の揺らぎに対する不安が表されているのだ。

次いで、重婚問題はイングランドにおける結婚の本質を揺るがすものでもある。ヴィクトリア朝時代のイングランドでの結婚は、結婚予告し、教会で夫婦になることを誓うものと、登録所で証人をもとに行われるものがあった。一夫一妻制をとるその結婚は、夫婦の間に生まれた男の子の誕生と共に、男性の家系を維持することを目指すものであった。家系の継続を支えた

のは、長男のみが称号や屋敷、土地などを相続する長子相続制と、息子がいない場合、最も近い男性の親族に相続を限定する限嗣相続制であり、これらは称号が長男、あるいは男性に引き継がれ、財産が分散されることを防いだ。イングランドにおける結婚と息子の誕生は、称号や財産を守ることにあり、それは中流階級以上の人々の暮らしと、彼らを中心とする階級社会を維持するためのものだった。ジョンとヘスターの結婚は、二人の間にできた息子がスクワイアの称号とカルディゲイト家の資産と財産、そして、フォーキングの伝統を受け継いでいくことを意味していた。ところが、オーストラリアでの結婚は、それらが身分の低いユーフェミアや彼女の関係者にわたるばかりか、場合によっては、オーストラリアに流出する可能性を秘めており、これは支配者層を中心にしたイングランド社会を土台から崩しかねないものなのである。すると、ジョンとヘスターがカルディゲイト、あるいはそれを意味する「名前」に言及しながら、自分たちこそが本当の夫婦だと訴えるところには、彼らの息子が一家の称号、資産、財産のすべてを相続できなくなることを防ぎたいという気持ちが表れていると考えられる。また、町の人々のヘスター母子が置かれている状況への嘆きも、支配者層に帰属するものが散り散りになり、従来の社会秩序の安定が脅かされることに対するものだったと言える。このように、重婚問題はイングランドの結婚制度と社会秩序が直面する危機を象徴しているのである。そして、その引き金になったのは移住であり、ケンブリッジの法廷が出した判決であったのだ。

1862年、アイルランド出身の判事ジェームズ・ホワイトサイド（James Whiteside）は庶民院で、「一夫多妻制は認められてなかったが、ある男は三つの王国のそれぞれに妻を持っているかもしれない」と発言している[3)]。これが示すように、大英帝国内外にはイングランドとは異なる結婚制度と結婚慣習があった。例えば、当時のスコットランドではイングランド同様に、結婚予告をして教会で結婚する人々が多かった。しかし、親の許可なしに女性は12歳、男性は14歳から結婚できたため、私的に結婚の約束を交わしたという証拠や結婚の約束に伴う性的関係、あるいは同棲が確認された場合に結婚を認める秘密婚も盛んだった（Rebecca Gill 61）。アイルランドでは、アイルランド国教会、プロテスタント、あるいはカトリックで結婚方式が異なっていた。カトリックの場合、カトリックの教会法に則って結婚式は行われ、式をつかさどる司祭は結婚する二人が少なくとも１年間、カトリック教徒であることを確認し、証人を立ち会わせて式を行い、教区の登録所に結婚の事実を記録する必要があった（Gill 61）。さらにまた、植民地などで布教活動に従事した人々や旅行者が残した報告書や旅行記に記されているように、世界各地には様々な結婚慣習があった。『アテナイオン』（*The Athenaeum*）の編集者であったウィリアム・ヘップワース・ディクソン（William Hepworth Dixon）は、1866年にアメリカを訪れた時、ヨーロッパからやってきた人々が、モルモン教の一夫多妻の慣習を受け入れて暮らしているのを目撃している（Gill 65）。

国際間、あるいは地域間の制度と慣習の不一致は、重婚や子供の嫡出問題、相続と国籍

に関わる問題を引き起こした。イングランド出身のマリア・テレサ・ロングワース（Maria Theresa Longworth）は、スコットランドでの婚約とアイルランドでカトリック式の結婚式を行ったことを証拠に、彼女を捨てて別の女性と結婚したアイルランド人ウィリアム・チャールズ・イェルバートン（William Charles Yelverton）を重婚罪で訴えた。スコットランド出身の父親とアメリカ人の母の間にアメリカで生まれたウィリアム・シェデン（William Shedden）は、彼が生まれた後に両親が結婚したため、スコットランドで非嫡出子とみなされ、父親が所有するスコットランドの土地を相続できなかった。これに対しウィリアムは裁判を起こすが、これは父親の出身国とは異なる国で、国籍の異なる未婚の両親の間に生まれた子供に生じる嫡出と相続の問題を露呈することになった。

移住などを含む人的移動は、様々な国や地域で結婚関連の問題を引き起こした。作中のジョンとユーフェミア、そしてヘスターとの間で起こる重婚問題は、まさにそのような実情を踏まえたものなのである。そして、裁判で認められたジョンとユーフェミアの結婚は、イングランド以外の国や地域の制度や慣習を認めるものであり、これはイングランド中心主義を否定するものでもあるのだ。政府は移住を通じて、自国の制度や文化が植民地に根付くことを期待した。しかし、作中の重婚問題はその限界を示し、皮肉にも移住がイングランド中心主義の浸透を妨げていることを明らかにしているのである。

それでは、有罪判決を受けたジョンを救い出そうとするバグワックスによる封筒分析の顛末について検討していく。ジョンの有罪が決定した後、バグワックスは法廷で封筒に押された消印が偽造であることを十分に説明できなかったことを悔やむ。そこでバグワックスは、封筒に押された消印の分析を粘り強く続ける。彼を駆り立てるのは、ジョンの無実の罪を晴らし、彼が再びと妻子とともにフォーキングで暮らせるようにしたいという思いである。実はここに、バグワックスの保守的価値観をみて取ることができる。次の引用は、バグワックスが有罪判決を受けたジョンと、彼と引き離されたヘスター母子に対する気持ちを述べたものである。

> ‘. . . When I think of that poor dear lady and her infant babe without a name, and that young father torn from his paternal acres and cast into a vile prison, my blood boils within my veins, and all my passion to see foreign climes fades into the distance.’（509）

先述したように、ジョンが有罪であってもヘスターとの結婚は法的に認められているのだが、バグワックスはジョンとヘスターの子供を「名前を失った彼女の赤ん坊」と呼び、一家が陥っている状況に憤慨している。彼もまた、サー・ジョンたちのように、ジョンとユーフェミアとの結婚が認められたことで、ジョンとヘスターのイングランドでの結婚が蔑ろにされたと感じており、二人の結婚こそが、オーストラリアのものより正当で絶対だと考えているのである。

さらに、バグワックスはジョンがフォーキングの土地から引き離されたことにも反発している。これはフォーキングが意味するカルディゲイト家の富と名声、そして伝統が失われることへの恐れを示唆しており、換言すれば、イングランドの伝統的社会体制の揺らぎに対する危機感を示すものである。消印の真実を見極めようとするバグワックスは、カルディゲイト夫妻の幸福を願う善意の持ち主である。しかし、封筒分析を行う過程で、バグワックスがジョンとユーフェミアの内縁関係を問題視することはない。彼はジョンの道義的責任には興味がなく、ジョンとヘスターが本当の意味で家族として再出発することには無関心である。この一件に対するバグワックスの願いは、あくまでもジョンとヘスターの結婚継続と、それが保障する既存の社会体制の存続なのである。既に述べたように、封筒は植民地での結婚を認めるには十分なものとは言えない。それにも関わらず、トロロープは封筒の真相を究明し、イングランドでの結婚の絶対性を訴えるバグワックスを描いた。ここに、イングランドの伝統的社会体制の存続を願う作家の態度を垣間見ることができる。

ユーフェミアとクリンケット、そして二人がジョンをゆするために連れてきたジャック・アダムソン（Jack Adamson）とアンナ・ヤング（Anna Young）の四人は、ジョンから受け取った２万ポンドの配分を巡って仲間割れする。そして、十分な分け前をもらえなかったアダムソンが警察に行き、ジョンとユーフェミアとの間に結婚はなかったと暴露したことで、ほかの三人は警察に捕まることになる。同時に、バグワックスが封筒に押された消印のスタンプの偽造を突き止め、封筒がジョンによって送られたものではないことを証明する証拠を提出したことから、服役中のジョンの処遇を見直すべきだという声が上がり、司法大臣は判事ブランバーにジョンに下された判決を再考するよう促す。これに対し判事は、ジョンのゆすりに加担した四人の人物が本当に不審人物であるならば、ジョンの無実は裁判で証明されたはずであること、さらに、ジョンが支払った２万ポンドや封筒を勘案すれば、ジョンの罪は明らかであると主張する。そして、判決結果を変えることはイギリス司法への侮辱だと憤慨し、有罪判決は妥当だと言い切る。状況が膠着する中、庶民院議員ブラウン氏（Mr. Brown）は、ジョンに恩赦を出すことですべてが解決すると考える。

> Mr. Brown looked into the matter, and was of opinion that it would be well to pardon the young man. Even though there had been some jumping over a broomstick at Ahalala, why should things not be made comfortable here at home? What harm would a pardon do to any one? – whereas there were so many whom it would make happy. (567)

ブラウン氏はオーストラリアでの結婚はなかったとみなし、過去を忘れ、ジョンとヘスターの結婚がうまくいくよう取り計うべきと考える。また、マリアとのことでジョンに不信感を抱い

ていたシャンド家さえも、彼とヘスターが元の暮らしを取り戻すことを望む。そのほか、世間の人々からもジョンの解放を求める声が上がり、司法大臣は自ら動いて、ジョンに恩赦を下し、ジョンはヘスターの元に戻ることになる。

バグワックス同様、恩赦を後押しする人々もまた、ジョンがヘスターと結婚する前にユーフェミアと婚約していたことや、それを秘密にしてヘスターと結婚した点には触れず、ジョンとヘスターの結婚生活が続くことを願っている。騒動の渦中にいるジョンとヘスターが、家族としていかに再出発していくかということよりも、結婚という法的枠組みの維持が重視されているのだ。ここに、ジェニー・ボーン・テイラー（Jenny Bourne Taylor）が述べる、法的に結ばれた家族の血が受け継がれていくことを重んじたエドモンド・バークの考えを支持する作家の家族観を読み取ることができる（53）。実際に起きた重婚や資産などを巡る裁判、一夫多妻のしきたりに関する記述から、当時の人々は国や地域によって結婚制度やそのあり方が違うことを認識していたはずだ。したがって、カルディゲイト夫妻の結婚生活が再始動するというエンディングは、当時の読者を安心させるものであったはずだ。しかし、恩赦は有罪判決で認められたオーストラリアでの結婚を否定するわけではないため、ジョンの重婚罪が消えるわけではない。また、イングランドでの結婚は、ジョンの嘘と不誠実なオーストラリアでの行動の上に成り立っているのだ。ジョンとヘスターの暮らしが戻り、ユーフェミアたちが逮捕されることで、イングランドで成立した結婚は一時的に安泰となるが、その永続性は不確かなものなのである。

おわりに

『ジョン・カルディゲイト』では、オーストラリアから戻ってきたジョンが、ユーフェミアによって重婚罪で訴えられるというセンセーショナルな出来事が起こる。その過程で明らかにされるのは、ジョンの人間的成長がオーストラリアとは無関係に描かれている点だ。植民地に長期滞在したにも関わらず、作家の当地に対する悪印象は拭いきれなかったようだ。また、トロロープが中流階級の読者を意識して執筆した結果、彼が描出した帰国者ユーフェミアは、オーストラリアへの否定的なイメージを作り出すものとなった。一方、本作品がオーストラリアの魅力を描いている点は無視できない。オーストラリアの柔軟性が、ジョンとユーフェミアのオーストラリア移住をある程度成功に導いているからである。作家のオーストラリアに対する偏見とイングランドの優位性を信じる態度は否定できない。しかし、作中の登場人物たちの人生にはオーストラリアが持つ可能性が表出されており、オーストラリアと結びつき、その力を取り込んでいくイングランドの伝統的社会のあり様が、ジョンの経済力を歓迎するケンブリッジ社会に提示されているのだ。

作中におけるトロロープの関心は、愛情に基づいた家族のあり方を重んじることよりも、イングランドにおける結婚という夫婦の法的結びつきの継続にあった。小説ではジョンの称号や資産、財産は守られ、トロロープの作品によくみられるような中流階級以上の人々の暮らしが保証される。しかし、ジョンとユーフェミアの植民地への移住とそこからの帰国に伴って起こるヘスターを巻き込んだ重婚問題は、移住政策の行き詰まりと、イングランドの法律や制度、価値観を中心に捉えることの難しさを詳らかにする。換言すれば、重婚問題を引き起こした移住と移住先からの帰国が、イングランドの優位性を弱め、その伝統的社会秩序を揺るがせているということなのである。トロロープにはイングランドを中心に据えた保守的価値観を容認するところがあるが、作家はイングランドを基準とみなす権威の弱まりと、それによって生じるイングランド社会の緊張感を作中に表出しているのである。つまり、トロロープには従来の社会規範が抱える問題を掘り下げようとする視点があるということであり、ここに当時の伝統的価値観に対する作家の葛藤を見出すことができるのだ。

謝辞
本研究遂行にあたり、日本学術振興会、科学研究費助成事業（課題番号：19K13126）の助成を受けた。ここに厚く御礼申し上げる。

注

1）本稿で使用したこの作品のテクストは Anthony Trollope, *John Caldigate*（Oxford: Oxford UP, 1993）であり、本文中括弧内にその頁数を示した。また、同書の日本語訳は筆者の拙訳である。

2）本稿で使用したこの作品のテクストは Anthony Trollope, *Australia and New Zealand*, 2 vols.（Cambridge: Cambridge UP, 2013）であり、本文中括弧内にその頁数を示した。また、同書の日本語訳は筆者の拙訳である。

3）Rebecca Gill, “The Imperial Anxieties of a Nineteenth-Century Bigamy Case,” *History Workshop Journal* 57（2004）59.

引用文献

Archibald, Diana C. *Domesticity, Imperialism, and Emigration in the Victorian Novel*. Columbia: U of Missouri P, 2002.

Birns, Nicholas. “The Empire Turned Upside Down: The Colonial Fictions of Anthony Trollope.” *ARIEL* 27.3（1996）: 7-23.

Gill, Rebecca. "The Imperial Anxieties of a Nineteenth-Century Bigamy Case." *History Workshop Journal* 57（2004）: 58-78.

Hall, N. John. Introduction. *John Caldigate*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1993. vii-xix.

Harper, Marjory, and Stephen Constantine. *Migration and Empire*. Oxford: Oxford UP, 2010.

Hobsbawm, Eric J. *Industry and Empire: From 1750 to the Present Day*. New York: Penguin, 1990.

Kincaid, James R. *The Novels of Anthony Trollope*. Oxford: Oxford UP, 1977.

Kingston, Beverley. *The Oxford History of Australia: 1860-1900, Glad, Confident Morning*. Vol. 3. Oxford: Oxford UP, 1988.

---. "Women in Nineteenth Century Australian History." *Labour History* 67（1994）: 84-96.

Myers, William. "George Eliot: Politics and Personality." *Literature and Politics in the Nineteenth Century*. Ed. John Lucas. London: Methuen, 1971. 105-29.

Polhemus, Robert M. *The Changing World of Anthony Trollope*. Berkeley: U of California P, 1968.

Taylor, Jenny Bourne. "Bastards to the Time: Legitimacy as Legal Fiction in Trollope's Novels of the 1870s." *The Politics of Gender in Anthony Trollope's Novels*. Eds. Margaret Markwick, Deborah Denenholz Morse and Regenia Gagnier. London: Routledge, 2018. 45-60.

Thomas, Kate. *Postal Pleasures: Sex, Scandal, and Victorian Letters*. Oxford: Oxford UP,2012.

Trollope, Anthony. *Australia and New Zealand*. 2 vols. 1873. Cambridge: Cambridge UP, 2013.

---. *John Caldigate*. 1879. Oxford: Oxford UP, 1993.

Wagner, Tamara S. "Settling Back in at Home: Imposters and Imperial Panic in Victorian Narratives of Return." *Victorian Settler Narratives: Emigrants, Cosmopolitans and Returnees in Nineteenth-Century Literature*. Ed. Tamara S. Wagner. London: Pickering & Chatto Limited, 2011. 111-28.

Williams, Raymond. *The English Novel: From Dickens to Lawrence*. New York: Oxford UP, 1970.

Wolfreys, Julian. *Being English: Narratives, Idioms, and Performances of National Identity from Coleridge to Trollope*. Albany: State U of New York P, 1994.

（はしもと・しほ　外国語学部准教授）